

12月学習会のご案内

平成24年11月26日

映像を読み解く。



先週と今週末、映画の興行成績のトップを走るのは某有名アニメ映画です。私が教員になって間もない頃、大きな話題となった作品ですが、再び新劇場版としてシリーズ化されたものです。夏には瀬戸内市の刀剣博物館で特別展（←）をやっていたあの作品です。

ストーリーが難解で、様々な解釈が可能なことから、この描写はこういうことではないか、これはこういうことを象徴しているのではないかなどと、見た人がいろいろと読みを交流することで、当時、ずいぶん話題となった作品です。私も一視聴者として友達と答えのない討論をしたものです。今からして思えば、どうしてこんなに難解で答えの出ない話を一生懸命していたのだらうとも思います。

ところが、新劇場版になり、客層の幅もその数も一気に増えました。映画館のお客さんの様子もマニアックな雰囲気の人だけではなくになりました。（昔はみんなマニアックな感じがするよね…と友達と話していました。多分周りから自分たちもそう見られていたとも思うのですが…笑）これで「わけのわからない」物語の世界を「ああではないか」「こうではないか」と話をする人が増えるのは間違いないな……と確信しました。

人は基本的にわけのわからないものに対して、自分なりの解釈を一生懸命に語るのは好きなものかもしれないと感じました。また論じる相手がいることで自分の解釈を広げていくことが好きなものかもしれないとも思いました。きっと知的欲求が満たされるのでしょうか。

私も我が家の中学生の娘と見に行き、鑑賞後いろいろ解釈をぶつけ合ってみました。正直、自分が読み取れなかったところを平然と語る娘の解釈を聞き、自分の読みの甘さに気付かされる部分がありました。我が子に描写の解釈を教わることになるのがこんな機会になるとは思いもよりませんでした。

関心のない方からして見れば、たかだか一本のアニメ映画の話題なんですけど、いろいろ考えさせられるところのあったお話です。関心のある方は難解さを感じにぜひ映画館に足をお運びください。上記の意味が実感できますよ。「ああ、おもしろかった！」とはなりにくい一品でした。

日時 平成24年12月22日（土）9:30~12:00

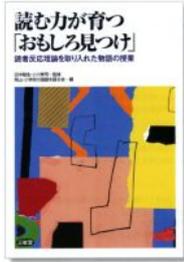
場所 岡山大学教育学部附属
教育実践総合センター
（東山ブランチ）

※岡山大学教育学部附属小学校の西側・
道向いの建物です。いつもと会場が違
いますのでご注意ください。

連絡先 小野 桂（おの けい）
keikeioh@fuzoku.okayama-u.ac.jp

内容 説明的な文章の学習展開について
「天気を予想する」（5年 光村図書）





ついに「おもしろ見つけ」の本が発売されました。附属小学校には常時キープしてありますので、いつでも声を掛けてください。店頭よりもお得になります。(一応、来られる前にご注文のご一報をいただくとありがたいです。) 代金引換となりますのでよろしくお願いいたします。多くの方に手にとっていただけるように宣伝活動がんばりましょう！

書店にも並んでいますね。飛ぶように売れてくれるとさらに嬉しいのですが。

11月の学習会の報告

11月の語る会は、5年生の説明文「天気を予想する」を子どもがどう直観したらよいか、そしてどう勉強していくかについて話し合われました。

田中先生より

○岡山大学の附属学園 小中一貫

- ・今後、カリキュラムの研究に進んでいく 小中の系統性についての研究へ
→ どうなるか難しさを感じる

○京都教育大学附属桃山学園 小中連携

- ・「一貫教育」ではなく「連携教育」 相互乗り入れ授業
- ・小学3年生と中学2年生の合同授業
小学校の先生がメイン 中学校の先生がサポートに回る
「京都新聞」のお気に入りの記事の紹介 まとめて報告をする授業
小学3年生が中心の授業 まとめて発表をする
中学2年生は小学生の内容理解とまとめ方をバックアップする
→ 一般の新聞記事なのでサポートなしでは読み取れない …交流の必然がある
要約力が求められる

※小学生は実りがある授業 中学生には何の成果があるか？

大らかな構えで臨めればよいが……

- ・連携教育は3学年以上の差があると効果的
差が1・2年では逆転現象がおこる可能性がある

○附属学園内での教員の行き来

- ・授業を見せ合うだけでなく、小中学校の教員の積極的な交流があるとよい

○岡大附属中学校の記念講演

- ・金原瑞人さん

岡山県出身の翻訳家 光村図書4年「3つのお願い」なども翻訳 約400冊手がける

演題「日本語と英語はどちらが便利か」

- ・翻訳の際、「I」と「You」が最も悩む

「I」は「わたし」か、「ぼく」か、「おれ」か……どれにするかで作品の雰囲気が大きく変わる
作品として日本とアメリカとでは全く別物になってしまう可能性がある

日本は登場人物が男か女かはっきりしないとイケない

アメリカは性別はどちらでもよい 男か女か最後までわからなくてよい

- ・マンガの翻訳は作業が最も困る

日本のマンガは縦書きが主流。右へとめくっていく。

海外では横書きが主流。左へめくっていく。

翻訳した場合、絵の向きが変わってしまう その絵のままではいけない
絵の反転をすると困る

右利きが左利きになる 絵のバランスが崩れる → 教科書でも同じ
絵本でも同じ事が起こる

絵の反転 「スイミー」「お手紙」

手抜き作品はそうした処理が雑である

小川先生より

○幼小中連携について

- ・教員の交流だけでなく子どもの交流もしっかりとできるとよい
- ・小学校の校舎で幼稚園児が暮らしたり、中学校の校舎で小学生が暮らしたりする機会としたらいいのではないか

○学際的な力をつける

- ・脳科学の見地から「総合脳」をつくる
専門的部分を詳しく見ていく「分析脳」では埋めきれないすきまを埋めていく力
- ・幼小中のカリキュラム研究
子ども像を縦割りだけで見ていってもそれ以上研究は進まないのではないか
体裁だけしか整わない
- ・連携教育による総合的に脳の活性化を促す活動は有効であろう
今までの学校教育では育たなかった力が育っているのではないか

○6年「森へ」の授業

- ・「〇〇反応」単品では語れない状況
結び付ける反応が見られる
今までの学力では説明ができない
- ・文学の脳みそでスタートして、紀行文の脳みそへ変わっていく
「白い花が咲く」……筆者 星野さんの感動反応（紀行文らしさ）
もった力をどう変化させるか 単品から総合的な反応へ
- ・単元の構想
初期の反応からだんだんと変化していくことを描く

○全体的論理的直観（知的直観）

- ・説明文の授業は全体的論理的直観を確かめていく
題名 括の部分 問いの部分 文章の骨格
→ 直観をどう設定し、「直観を確かめよう」というめあてにしていくか
- ・文学の場合の直観は情意的
説明文はどうめあて意識へ変えていくか ここがポイント

○「天気を予想する」だとどういう直観をもつか ……今回の課題

- ・何を手がかりに直観をもつか
- ・どういう直観をつかむか どうやってそれを確かめていくか
- ・1次はスピーディーに展開 2次へのストーリーを描く
- ・段落ごとにつかんでいく
- ・中学校では、新しい課題に出会ったら、読み方を選べるくらいにまで成長させたい

話し合いの結果 グループのまとめ

グループ1

○題名読み「天気を予想する」

「だれが」が抜けている 予想してから読むことで「あ、自分なんだ」と直観できる

「どうやって」を考える 予想してから読むことで「人のすばらしさ」に直観できる

○どんな直観ができるか

・文章全体の直観した場合

最後に頼りになるのは自分なんだな（自分で判断できるようにはならないのだな）

さまざまな情報を扱える人にならなくてはならないのだね

・意味のまとまりに直観した場合

3つのまとまりがありそうだ

科学技術や国際協力ってすごいな 進歩しているんだな

昔からの知恵ってすごいな → 人間ってすごいな

・初発の感想をもとに両方を確かめていくようなめあてを設定したい

2次からはまとまりごとに読んでいくことが可能

グループ2

○直観をどこから生まれるのか

・どういう手法で直観したか子どもに意識させたい

題名 問い まとめ 前書きや後書き ……など

・みんなが共有する先生の発問

「武田さんの伝えたいことは何か」

まとめに目を向けて、はじめに戻っていく展開の授業になる

「一番心に残ったところはどこか」

情意面の方へ寄った意見が出て来る

・子どもが既にもっている力によって展開は変わる

○天気を予想するのは誰なのか

・子どもは想像を膨らませながら読む

すごい → 最後は自分が予想するんだ

物から入り、人間の感性や知恵にはたらきかける文章

グループ3

○直観をとらえるとはどういうことか

・どんな流しになるか

大きく2タイプ

最終的に「なんだ人か」と思う子ども

「へー」「ほー」と思いながら読む子ども

共有するためには…

はじめのまとまり → ああこうやって天気を予想するのか

2つめのまとまり → こんなに科学的なのか

最後のまとまり → 結局、人か ……3つの直観

1次で一読総合法的にまとまりごとに順に読んでいく

・なんでこのように自分は読んだのかを確かめる

2次の授業 「なんだ人か」と思わせた論の展開は何か

「へー」「ほー」と思わせた説明の仕方は何か

情報をだんだんと積み重ねることで認識を高める展開を読み味わう

・上記の展開は、筆者の用意している3つの問いに答える授業になっていない

読み手が答えを見つけながら読む、読みの道筋が十分に取扱えないのが残念

小川先生

○説明文の授業で直観力をつける

- ・一度読んだら読み取れる子どもを育てるのが最終目標

○直観のアプローチの仕方

- ・題名 問い 問いとまとめ(括) キーワードをつなぐ

アプローチのバリエーションはいろいろ 子どもがどうやって直観したかを自覚する必要がある
バリエーションをもとにしながら確かめていくとそのよさがわかる

- ・交流する意味

みんな直観へのアプローチが違う

○書き手を意識する

- ・高学年はもっともっと意識すべき

書き手の名前を挙げながら進める「武田さんって～」

例：「国際協力」の発想 ……書き手が南極に行っているからこそ
読者とのかかわり

書き手を意識して読む 書き手との対話

自分のものの見方が広がる

筆者のもの見方と比べたりないものを取り入れようとしたりする 知的

- ・「なんだ人か」「やっぱり人なんだな」は大きな違い

授業の終わりは「やっぱり人なんだな」

- ・直観

こういうことをこういう仕掛けから直観しました ……内容と仕掛け 説明文らしさ

○○さんってすごいな 感じるどころ ……情意的 文学と重なるところ

田中先生

○教科書の「学習の手引きの進め方」はどうか？

- ・表やグラフの効果を実感するタイミングに違和感
- ・3つの問いの扱い

事実の報告と問題提起

問い① 的中率はどのように高くなったか(これまでのことに対する問い)

問い② これから100%になるのでしょうか(これからのことに対する問い)

6段落までは事実の報告と括することができる

7段落では見解が示される

文章全体を統括する問い 3つめが大切だと言える

10段落のまとめでは、3つめの問いの答えだけになっている

「今、ここ」という強調表現

○5年生の発達段階

- ・題名読み 問いと答え まとめは十分に意識できる学習者の育っているようにしたい
- ・「筆者が本当に言いたかったことは何か」と問うことで学習課題が明確になるのではないか
中学年・高学年

筆者を意識するようになって欲しい ……題名の「予報する」「予想する」の違い

気象予報士だけのことではない

思考の方法を獲得するように

筆者が本当に言いたかったのはどの問いでしょう